

ハリー・ポッターのイギリス (1)

——『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会における人種問題

坂 田 薫 子

はじめに

2007年に児童文学、ファンタジー小説『ハリー・ポッター』シリーズ¹を完結させた後、J・K・ローリング (J. K. Rowling) が初めて大人向けの読み物として著した小説²、『カジュアル・ベイカンシー——突然の空席』 (*The Casual Vacancy*, 2012) の本カバーの後袖によると、全七巻からなる『ハリー・ポッター』シリーズは、2012年の時点で、「全世界で四億五千万冊以上を売り上げ、二百以上の国々、地域に流通し、七十三カ国語に翻訳され、映画は八本制作され、すべて大ヒットを記録している」世界的なベスト・セラーとなっている。

『ハリー・ポッター』がローリングの本国イギリスのみでなく、世界のあちこちで、子どもから大人まで、幅広い年齢層の人々に愛読され、世界的な社会現象となった背景には、世界的なベスト・セラーとなった他の児童文学、ファンタジー小説同様、多くの読者がこのシリーズに、子どもが大人へと成長するために直面する通過儀礼とその経験のもたらす葛藤、家族愛、人類愛など、国や地域、言語、性別、年齢を超えて、多くの人々が共有している感情や思想、問題意識を読み取っているからに違いない。ヴォルデモート (Lord Voldemort) にドイツ・ナチスのヒットラーとの類似を見出す読者がいたり、魔法省 (Ministry of Magic) が次々と打ち出す政策の中に9.11以降の西欧諸国のテロ対策との類似を見出す読者がいたり、確かに、『ハリー・ポッター』シリーズには時代や国境を超えた世界の宗教問

題、政治問題のもたらす影響の数々を読み取ることが可能である。

しかし、その一方で、物語の終盤、「第二次魔法大戦」(The Second Wizarding War、別名「hogwartsの戦い」(The Battle of Hogwarts))に集結するのはイギリスの魔法使いのみで、この小説が描いているのは国や地域を超えた広い世界というよりもむしろ、作者の本国イギリスという限られた世界であるということもまた否定できない事実である。ローリングが特に『ハリー・ポッター』シリーズに描き出そうとした世界とは、このシリーズが出版された1990年代から2000年代のイギリスという特定の社会でもあるのだ。

そこで、論文「ハリー・ポッターのイギリス」では、世界的ベスト・セラー『ハリー・ポッター』シリーズに読み取ることのできる、現代のイギリス社会が抱える諸問題と、それらに対する作者ローリングの態度、回答について考察していきたい。まず本論文「ハリー・ポッターのイギリス(1)」では、主人公ハリー・ポッター(Harry Potter)が十代を生きる魔法界という仮想の世界に垣間見られる、1990年代から2000年代の現実のイギリス社会における人種問題を分析し、作者ローリングが人種問題をどのようにとらえていたのかについて考えてみることにする。

1. 人種の分布

ローリングがブラック(Black)家の三姉妹に、自分の尊敬するイギリス生まれの作家、ジェシカ・ミットフォード(Jessica Mitford)の伝記を反映させ³、ヴォルデモートにヒットラーを、「死喰い人」(Death Eaters)にナチスの歴史を象徴させていることは、既に何人もの研究者が指摘している。実際、作品内で「純血」(pure-blood)、「穢れた血」(Mudblood)、そして「半純血」(half-blood)という表現があからさまに使用されていることや、ローリングがインタビューでヴォルデモートとヒットラーの類似を認めたことから⁴、『ハリー・ポッター』シリーズは児童文学なので、人種の問題は関与していない、などというナイーブな発言をすることは認められない。

もちろん、一見したところ、肌の色の異なる人種間の争いは『ハリー・ポッター』シリーズでは描かれてはいないように見える。しかし、研究者たちの中には、シリーズの中心人物たちのほぼ全員が白人人種で、他人種があまり登場しないことを重く受け止め、作者ローリングの態度を批判する者も少なくない。このことは「ハリー・ポッターのイギリス(2)」で詳しく論じるが、現実世界と『ハリー・ポッター』に描かれている魔法界を同一視すれば、イギリスに古くから存在する「純血」の魔法族たちは、貴族を含むイギリス上流階級の置き換えと見なすことが可能である。となると、大抵の場合、「純血」の魔法族は白人であると考えるのが妥当である。また、中心人物であるハリー、ロン・ウィーズリー (Ron Weasley)、ハーマイオニ・グレンジャー (Hermione Granger) が白人であることに疑問はないであろうし、彼らの所属するポッター家 (そしてダーズリー (Dursley) 家)、ウィーズリー家、グレンジャー家、さらには彼らに敵対する巨大なブラッカー族も白人と考えるべきであろう。

しかし、上述のような批判はあるものの、これは取り立てて不自然なことではない。1997年から2007年までの『ハリー・ポッター』シリーズ出版期間中に行われた2001年度のイギリスの国勢調査によれば、イギリス社会 (厳密にはイングランドとウェールズ) の人種 (ethnicity) の分布は白人 (White) が91.3パーセントを占めている。残りの部分を占めているそれ以外の人種は、例えば混血 (mixed) が1.3パーセント、次に、インド系、パキスタン系、バングラディッシュ系などのアジア系は合わせて4.4パーセント、カリブ系、アフリカ系など分類上「ブラック」(Black) と呼ばれる人々が合わせて2.2パーセント、そして、中国系を含むその他の人々が0.9パーセントとなっている⁵。このように、イギリス社会の十人中九人が白人であるという現実を踏まえれば、ホグワーツ魔法魔術学校 (Hogwarts School of Witchcraft and Wizardry) の白人人種と非白人人種の分布は、非白人人種間の分布には多少の偏りはあるものの、現実を反映していると言えるだろう。

ハリーとロンのダンス・パートナーとして存在感を示すパドマ・パティル (Padma Patil) とパルヴァティ・パティル (Parvati Patil) 姉妹は、その名からインド系の双子の姉妹であることが推察される。また、ハリーの初恋の相手、チョウ・チャン (Cho Chang) もその名から、中国系の華人であろうと見当がつく。さらには、登場当初はその肌の色への言及はなかったが、グリフィンボール (Gryffindor) 寮の「クイディッチ」(Quidditch)・チームのチェイサー、キャプテン、そして外伝⁶では、ジョージ・ウィーズリー (George Weasley) の妻となるアンジェリーナ・ジョンソン (Angelina Johnson) が、第四巻『炎のゴブレット』(287)に入って、カリブ系あるいはアフリカ系の女性であることが分かる。その他にカリブ系あるいはアフリカ系の登場人物と考えられているのは、ハリーたちの友人としてはディーン・トマス (Dean Thomas) やリー・ジョーダン (Lee Jordan) が⁵、さらにはドラコ・マルフォイ (Draco Malfoy) の友人のブレイズ・ザビニ (Blaise Zabini) がいる⁷。

ただし、成人の非白人人種の登場人物は残念ながら限られている。確かにその苗字を見ると、スラヴ系などの他民族出身かと思われる成人の登場人物も存在する一方で、人種が明らかにされた上で目立った活躍をするのは、カリブ系あるいはアフリカ系のキングスレー・シャックルボルト (Kingsley Shacklebolt) しかいない。hogwarts魔法魔術学校の生徒たちとは異なり、魔法界で働く大人たちの民族分布は明らかに偏っていると言わざるを得ない。こうした偏りを生じさせている魔法省の内情については、階級問題を取り扱う「ハリー・ポッターのイギリス (2)」で詳しく考察することにする。

『ハリー・ポッター』シリーズでは、こうした異なった民族の歴史を背景にした登場人物たちが、お互いの肌の色を理由に差別し合う場面は登場しない。しかし、だからと言って、ローリングは人種問題に触れることを避けているとか、逆に、白人至上主義であるとか、はたまたエリート主義であるという結論に飛びつくのは性急である。なぜなら、実はローリングは、

もっと複雑な表象の仕方でも人種差別を描くことに成功しているからである。人種の異なりによる差別化、区別化を、ローリングは第一に、魔法族か非魔法族「マグル」(Muggle、魔力を持たない人間)かによって表象している。しかし、魔法族も結局のところ、魔法が使えるという特殊な才能を持った人間たちが、長い年月をかけて集団化して形成した集合体でしかなく、両親が魔法族ではあっても、生まれてきた子どもが魔力を持たないこと(彼らは作品内で「スクウィブ」(Squib)と呼ばれる)もある以上、魔法族は言わば特殊な才能を持つエリート集団のようなものであって、厳密な意味では別の人種ではない。魔法族がマグルに覚える差別意識は、人種間の対立というより、持つ者が持たざる者に持つ優越感に根ざしていると考えられる。そのため、「純血」と「マグル生まれ」の対立は、「ハリー・ポッターのイギリス(2)」で扱うことになる、異なる階級間の対立の表象として解釈することも可能になるのである。そして、ローリングは第二に、人種の異なりによる差別化、区別化を、魔法界の中であって、人間(magical human beings)か非人間(magical non-human beings)か、という対立によって表象してみせる。そこで本論文では、この二つの表象から、ローリングの人種観を探ってみよう。

2. 非魔法族「マグル」

まず、第一の点から考察すると、ドラコがハーマイオニに行く差別は、彼女の高い魔法能力への嫉妬心とは質を異にしている。ホグワーツ魔法魔術学校の四つの寮のうち、選民思想が著しいスリザリン(Slytherin)寮に属するドラコが最も嫌う寮が、ハリーやハーマイオニの属するグリフィンボール寮ではなく、差別をよしとせず、平等をモットーとするハッフルパフ(Hufflepuff)寮である(『賢者の石』88)ことが示すように、ドラコが行うハーマイオニへの差別は、異なる人種への嫌悪感として、ハリーへの差別は混血児への嫌悪感として読み取ることができる⁸⁾。ドラコが信奉するヴォルデモートとその仲間たちが行おうとしているマグル掃政策は、ローリ

ングの発言を待たずとも、ナチスのヒットラーのユダヤ人迫害を思い起こさせる。あるいは、エクルスシェア (Julia Eccleshare 80) のように、『炎のゴブレット』の第九章におけるヴォルデモート一派による「マグル狩り」(“Muggle-torture”『炎のゴブレット』704、“Muggle-baiting”『不死鳥の騎士団』172) に、アメリカの白人至上主義の秘密結社、「クー・クラックス・クラン」(Ku Klux Klan) を思い起こす研究者もいる。

ローリングがこうした差別を批判していることは、ハリー対ヴォルデモートの闘いの結果を待たなくても、「純血」主義信奉者たちが好んで用いている表現を借用すれば、ヴォルデモートの血の「穢れ」(“filth”) そのものに見出すことができる。ヴォルデモートはいわゆる「純血」ではない。彼の母は由緒正しい「純血」の魔女であるが、彼の父はマグルであり、彼自身は「半純血」である。彼自身が、自らが穢れていると見なし、抹殺せねばならないと考えている血の持ち主であるという矛盾が、彼の行為の誤りをほのめかしている。また、作品で最も邪悪な存在として描かれるヴォルデモートが「半純血」である一方で、彼の手からこの世界の平和を守ったと言える三人、ハリーとアルバス・ダンブルドア (Albus Dumbledore)、そしてハリーの母リリー (Lily Potter) が、それぞれ「半純血」と「マグル生まれ」なのだから、善悪や優劣は血(人種)で決まるものではないことが証明されていると言える。ダンブルドアのセリフ、「生まれではなく、どういう人物に成長したのが重要だ」(『炎のゴブレット』768) がローリングの主張を代弁していると考えられる。他にも、生まれや血(人種)が人の能力を決定するわけではないことは、例えば、ブラック家からはシリウス (Sirius Black) だけがグリフィンドール寮生となっていることや、パティル姉妹が別々の寮に入っていることが示唆している。

また、ローリングが人種差別を批判していることは、そもそもこの作品の中心をなすトリオの構成に見出すことができる。ロン、ハリー、ハーマイオニという「純血」、「半純血」、「マグル生まれ」の三人が友人関係にあることが、ローリングは差別のない世界を求めていることを端的に示して

いる。ローリングは、出自にこだわるヴォルデモート支持派を倒すために、出自の異なる三人を団結させることで、善悪の区別を、「純血」か、マグルか、ではなく、差別を行うか、差別を認めないか、という二項対立に区分し、後者に勝利をもたらすことで、人種差別の浅はかさを訴えようとしているのだ。

3. 巨人族

次に第二の点から考察してみよう。魔法界には、巨人 (giant)、ハウス・エルフ (house-elf)、人狼 (werewolf)、ゴブリン (goblin)、ケンタウルス (centaur)、水中人 (merpeople) など、魔法使い以外にも、魔力を持つ様々な魔法生物 (non-human magical creatures) が存在しているが、人間の魔法族たちはそうした非人間の魔法族を自分たちより劣った存在として差別している。私たち読者の生きる現実世界の基準から言うと、本来こうした魔法生物は、異なる種 (species) として分類されるべき対象のように思われる。しかし、『ハリー・ポッター』シリーズ内において人間の魔法族と非人間の魔法族の区別が行われるとき、両者の違いは“race”という英語で表現されている。例えば『不死鳥の騎士団』において、人間は巨人のことを自分たちとは別の“race” (474) であるとして区別し、ケンタウルスは自分たちと人間との違いを“We are a race apart.” (831) と述べ、『死の秘宝』において、ゴブリンが人間を“your race” (538) と区別し、ハリーとハーマイオニがゴブリンのことを人間とは別の“race” (557, 558) であると語っている。そうしたことから、魔法使いが自分たちとは異なる種である魔法生物に抱く差別意識には、現実の人間界における人種差別を見出すことが可能である。本論文では、その最も顕著な例として、巨人族への差別とハウス・エルフへの差別を詳しく考察してみる。

まず、魔法界における巨人族は、研究者たちによってしばしばアメリカ先住民族に譬えられる (Anatol 114)。魔法界の人間たちは既に過去に巨人族根絶を行っており、ハグリッド (Rubeus Hagrid) の母、フリドウルファ

(Fridwulfa) はイギリスの最後の巨人族の一人であった。巨人族は今、アメリカ先住民族の居留地 (Reservation) のような、ヨーロッパ北部のどこかの山岳地帯に定められた自治区 (“the giant communities” 『炎のゴブレット』479) に閉じ込められている。『不死鳥の騎士団』の第二十章で、ハグリッドとマダム・マクシーム (Olympe Maxime) がそうした自治区を訪ねた際、巨人族は長年異なる部族同士で争った結果、総数が激減している。そのとき、巨人族の自治区は「キャンプ」 (“camp” 471, 475) と呼ばれ、巨人族内の部族を表す表現として、「トライブ」 (“tribes” 471, 474) が用いられている点は示唆的である。前者の英語表現は捕虜などの強制収容所を示唆し、また後者の英語表現は一般的にあまり文明化が進んでいない小集団に対して用いられるものである。

また、巨人はいわゆる「野蛮人」 (savage) として描かれ⁹、二人が滞在中にも誰が「ガーク」 (“Gurg” 472) と呼ばれる族長になるかで殺し合いが起こる。ハグリッドは、戦いに勝利し、新たな族長となったゴルゴマス (Gollum) がつけているネックレスは人間の骨でできているように見えたと同想している (475)。巨人は他人種を食す野蛮人として位置付けられているようだ。事実、かつてローリングが自身のオフィシャル・サイトに掲載した「魔法使い普通魔法および基本態度試験」 (The Wizards' Ordinary Magic and Basic Aptitude Test、通称「ウォンバット試験」 (W.O.M.B.A.T.)) の中級にも、巨人が「人食い人種 (共食い動物)」 (cannibal) であることを示唆する問題が出されていた¹⁰。

そうした巨人族の血を引く半巨人のハグリッドは、魔法界で常に偏見に満ちた視線に晒されている。彼自身、魔法界における巨人族への偏見を知っているため、『炎のゴブレット』まで自らの出自の秘密を他人に打ち明けることはしなかった。彼が怪力なのは、その暴力性に原因があるのではなく、時々、巨人の母親から譲り受けた超人的な力の加減を忘れるに過ぎないのだが、ひとたび彼の出自が知れると、一部の周囲の人間の態度は豹変する。特に差別意識の著しいドロレス・アンブリッジ (Dolores Umbridge) に至っ

ては、まるで知的能力の劣った人間であるかのようにハグリッドに話しかけている（『不死鳥の騎士団』480, 492-497）。

ただし、マグルの父を忌み嫌ったヴォルデモートやセヴルス・スネイプ（Severus Snape）ほどではないにしても、半巨人のハグリッドでさえ、母の属する巨人族に共感を抱いてはおらず、巨人族への理解度は低い。異父弟で巨人のグロウプ（Grawp）を無理矢理イギリスに連れ帰り、「文明化」（“civilise”『不死鳥の騎士団』767）しようとする彼の態度には、他の種族に最も優しい人物として描かれているハグリッドでさえ、人間中心主義であることが露呈する¹¹。また、英語を覚え、イギリスで暮らす方が幸せであると信じて疑わないハグリッドの態度には、かつての植民地主義、帝国主義のイデオロギーも見え隠れする。環境の異なる「禁じられた森」（The Forbidden Forest）に一人連れて来られたグロウプは、住み慣れた故郷に戻ることを切望するあまり、言葉の通じないもどかしさからか、「暴力」を振るう。おそらくグロウプには他者を傷付けようという意図はなく、力の加減が分からないだけなのだが、ハリーはグロウプの本質が「残忍な」（“brutal”『謎のプリンス』274）のだと解釈し、グロウプのことを「凶暴な巨人」（“vicious giant”『謎のプリンス』203）と呼ぶ。そして意思疎通ができない原因をグロウプの愚かさに見出し、嫌悪感を拭えない（『謎のプリンス』203）。弱者への思いやりに満ちた人物として描かれているはずのハーマイオニにさえ、差別の意識は備わっている。グロウプが彼女の名前を記憶し、発音できたことに驚愕の念を隠せないハーマイオニ（『不死鳥の騎士団』833）も、ハリー同様、巨人は愚鈍であるという偏見と先入観に囚われていたことがうかがえる。言葉が違う以上、意思疎通がままならなくても当たり前の話なのだが、ハリーやハーマイオニの視点で語られるグロウプ像は、残念なことに、かつて大英帝国の植民者たちが語った被植民者たちの姿を思い起こさせる結果となっている。

ダンブルドアがハグリッドを巨人族のもとにつかわせたのは、「第一次魔法大戦」（The First Wizarding War）でヴォルデモートの側についた巨人族

が、「第二次魔法大戦」でも再びヴォルデモートに与する可能性が高いことを恐れたためである。しかし、そもそも巨人族がヴォルデモートの側につくことを選択したのは、『炎のゴブレット』(767)でダンブルドアがコーネリアス・ファッジ (Cornelius Fudge) に説明するように、ヴォルデモートがその報酬として、それまで人間の魔法族が巨人族に否定してきた自由を約束したからに過ぎず、巨人族のモラルが低いからではない。『不死鳥の騎士団』(100)でリーマス・ルーピン (Remus Lupin) が指摘しているように、ゴブリンもまた、これまで魔法族が彼らに否定し続けてきた自由を約束されたら、ヴォルデモートに味方することが予想される以上、問題は巨人族やゴブリンのような魔法生物の側にあるのではなく、人間の魔法族の側にあることがうかがえるようになっている。

4. ハウス・エルフ

次に、ハウス・エルフへの差別について考察してみよう。そもそも魔法で食事の支度も後片付けも可能なはずなのに、ホグワーツ魔法魔術学校はなぜ地下でハウス・エルフを酷使する必要があるのだろうか。また、なぜ学生寮を掃除させる必要があるのだろうか。本来自分たちで行える仕事を、無休で、しかも無報酬で担当させているハウス・エルフへの差別には、奴隷制の問題を読み取ることができる。実際、ドビー (Dobby) が自分の身の上を語る時、例えば『秘密の部屋』では「卑しい奴隷状態のくず」 (“the lowly, the enslaved, us dregs of the magical world” 193) という表現を用いているし、ハウス・エルフのおかれている状態を語る時、「奴隷状態」 (“enslavement” 『秘密の部屋』 193、『炎のゴブレット』 416) という表現を用いている。また、ウィンキー (Winky) によると、ハウス・エルフは代々同じ魔法族の家庭に仕えるという点も示唆的である (『炎のゴブレット』 417-418)。こうした描写を受けて、ハウス・エルフは研究者たちによって、しばしばアフリカ系アメリカ人に譬えられる (Carey 103-104; Dendle 165-166, 174)。ハウス・エルフに奴隷の姿を重ね易くするためだろうか、彼ら

の話す英語は不完全で、しばしばアメリカ映画などに登場するアフリカ系アメリカ人の喋り方 (Carey 103–104; Barratt 48) や、ピジン英語 (Dendle 165) と比較される。

ハウス・エルフ描写の第一の問題点は、彼らが自ら好んで人間たちに仕えたいと望んでいるかのように描かれているところにある。労働に対する賃金ももらえず、休暇さえ与えられないハウス・エルフの窮状に憤りを覚えたハーマイオニは、「屋敷しもべ妖精福祉振興協会」(the Society for the Promotion of Elfish Welfare、通称 S.P.E.W.) を立ち上げ、彼らの救済に乗り出す。しかし、ハーマイオニの働きかけにもかかわらず、ハウス・エルフは自由を望んでいるようには描かれていない。ハーマイオニは、衣服を与えられると自由の身になるハウス・エルフのために、掃除に来た彼らに拾わせようと、自分で編んだ帽子 (『不死鳥の騎士団』285) や靴下 (『不死鳥の騎士団』328) を寮内に置いておくが、ハウス・エルフたちはそのことに気付くと、グリフィンボール寮に掃除に来ることを放棄してしまう (『不死鳥の騎士団』425)。また、未だに奴隷状態にある他のハウス・エルフたちが、マルフォイ家への奉仕から解放され、自由の身となり、ホグワーツ魔法魔術学校に就職したドビーを羨ましいと思っている様子はなく、逆に彼の様子を迷惑そうに見つめている (『炎のゴブレット』414)。さらには、『炎のゴブレット』において、不本意ながらクラウチ (Crouch) 家へ奉仕から解放されたウィンキーは、そのことに傷付き、酒浸りになる。彼女は「解放された」(“freed” 414) ことを「恥辱だ」(“disgraced” 415) と感じ、賃金をもらうことを「落ちぶれた」(“sunk so low” 416) と「恥じて」(“shamed” 416) いる。ドビーは自由になった後も、仲間のハウス・エルフとの連帯感を確立するよりもむしろ、自分たちを搾取している人間の側に立つことを選ぶ。マルフォイ家への奉仕から解放されても、ハリーを新しい「主人」のように慕い、彼に献身的に尽くす。そうしたドビーの様子は、十八世紀後半、奴隷制廃止の議論が盛んだった頃に、奴隷制を肯定的に描こうとする作家たちによって描かれた“grateful Negro” の描かれ方に類似するもの

がある。

5. ローリングの視点

以上考察してきたように、魔力を持ち、見方によってはマグルよりも遙かに優れている魔法生物たちを、種が異なるという理由で劣った存在として差別する魔法界の人間たちの態度には、現実社会での人種差別に共通したものがあつた、そうした在り様を否定的に描くローリングは、人種差別を誤つたものとして糾弾しようとしていると考えられる。

しかし、敢えてここでポストコロニアル批評を持ち込み、少々極端な解釈を提案してみようと思う。そもそも魔法族がマグルを忌み嫌う根本的な理由はどこにあるのだろうか。「純血」か「マグル生まれ」か、という考え方は、 hogwarts魔法魔術学校の創立者の一人、サラザール・スリザリン (Salazar Slytherin) の去来にもうかがえるように、hogwarts魔法魔術学校設立時の十世紀頃にも既に存在していたことが明らかであるが、おそらく、いわゆる「魔女狩り」の被害に遭つた魔法族たちが、1689年の「国際魔法使い連盟機密保持法」(The International Statute of Wizarding Secrecy)¹²によって、マグルとの決別を選択したときから、魔法族の間に急速に普及したのと考えられる。こうした魔法界とマグル界の対立に、かつての大英帝国植民地とイギリス本国の対立を重ね、魔法界の「純血」種をかつての被植民者たちととらえてみるとどうなるだろうか。昔自分たちを根絶しようとしたマグルを今度は自分たちが根絶しようとしている魔法族の姿に、かつての大英帝国を逆植民地化しようとしている他人種の姿を読み取ることができないのではないかと。すると、果たしてどちらが加害者で、どちらが被害者なのかの判断が容易ではなくなる。しかし、争いの歴史を争いによって報復しようとするこの間違いを説く「混血児」ダンブルドアと「混血児」ハリーは、被植民者側ではなく、植民者側に立って、平和を取り戻す。選民主義者ヴォルデモートを排除したことで、人種差別の誤りを正したように読めるこのシリーズは、元被植民者の怒りに十分に耳を傾けることを

しないまま、元植民者たちにとって都合の良い終結を迎えているに過ぎないようにも見えてくるのである。

また、ローリングは、人間以外の魔法族を差別することの誤りを指摘する一方で、彼らの描かれ方は差別的であり、植民地主義、帝国主義を正当化する、いわゆる「劣った人種」の描き方のステレオタイプに当てはまるものがしばしば指摘されている。一例を挙げれば、ローリングによるハグリッドの描写には、彼女自身の無意識の差別意識が見え隠れする。ハグリッドの話す英語は文法上の誤りが多く、彼はいわゆるロウワー・クラスの英語を話している。ハグリッドは「純血」の父親に育てられた上に、ホグワーツ魔法魔術学校で教育を受けているのだから、これは作為的にとらえられても致し方ない。また、ハグリッドの料理は、食べ物の好き嫌いの違いというよりも、少々野性的で、一步間違うと野蛮さを指し示す表象になりかねない¹³。差別を助長するこうした指標の使用は批判を免れないだろう。こうした点が、『ハリー・ポッター』シリーズに描かれる「純血」思想批判、選民思想批判にも、結局のところ限界があると言うことを可能にするのである。

かつてマグルが魔法族を差別した理由は、魔法族が自分たちの持っていない魔法という能力を持っていたからであったが、迫害され、人間と決別した魔法族が、今度は、他の魔法使いとは違って、ヘビと話せる特殊な能力を持っているという理由でハリーを差別する(『秘密の部屋』の第十一章や『炎のゴブレット』(765-766))のだから、差別意識というものは人間の心理の奥深いところに巣食っていて、そう簡単に排除できないものであることをローリングは描いているのかもしれない。

結びにかえて

ローリングは差別意識の根絶の難しさを描くために、魔法界には古くから、他民族、他人種、他種を区別化、差別化する行為を行い易い政治体制が存在していたという舞台設定を行っている。「ハリー・ポッターのイギリ

ス(2)」では、こうした様々な差別意識を助長し、ヴォルデモートの台頭を容易にしてしまった魔法界の問題点とは何なのか、そのことを解き明かすために、魔法界の政治体制について考察した上で、魔法界と現実のイギリス政治について比較を行い、ローリングの政治観を探る予定である。そのためにまずは、『ハリー・ポッター』シリーズに表象されているもう一つの差別意識、階級意識について考察し、ローリングの階級観を探るところから始め、いかに『ハリー・ポッター』シリーズに登場する仮想世界の魔法界が現実世界のイギリスの置き換えとなっているかについての分析を続けていこうと考えている。

注

1 本論文中『ハリー・ポッター』シリーズ全七巻から引用する際には、タイトルの共通部分の「ハリー・ポッター」は省略した上で、翻訳本と映画で使用され、一般化している日本語タイトル、『賢者の石』(*Harry Potter and the Philosopher's Stone*, 1997)、『秘密の部屋』(*Harry Potter and the Chamber of Secrets*, 1998)、『アズカバンの囚人』(*Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*, 1999)、『炎のゴブレット』(*Harry Potter and the Goblet of Fire*, 2000)、『不死鳥の騎士団』(*Harry Potter and the Order of the Phoenix*, 2003)、『謎のプリンス』(*Harry Potter and the Half-Blood Prince*, 2005)、『死の秘宝』(*Harry Potter and the Deathly Hallows*, 2007)を用い、その頁数を示すこととする。

2 『カジュアル・ベイカンシー——突然の空席』(*The Casual Vacancy*, 2012)の本カバーの前袖には、宣伝文句として「ある小さな町についての大きな物語である『カジュアル・ベイカンシー——突然の空席』はJ・K・ローリングの初めての大人向けの小説。他に類を見ないストーリー・テラーによる作品」(強調は筆者によるもの)と記されている。

3 ローリングは2006年11月26日の『テレグラフ』(*The Telegraph*)紙にススマン(Peter Y. Sussman)の編集したジェシカ・ミットフォードの書簡集への書評(“The first It Girl”) (<http://www.telegraph.co.uk/culture/books/3656769/The-first-It-Girl.html>)を書き、子どもの頃からミットフォードに憧れていたと述べている。それを受けて、例えば『ピープルズ・ウィークリー・ワールド』(*People's Weekly World*)紙の編集者アルバノ(Teresa Albano)は、2007年7月20日に、「読書の夏、闘争、ハリー」(“A summer of reading, struggle and Harry”) (<http://www.peoplesworld.org/a-summer-of-reading-struggle-and-harry/>)において、ミットフォード姉妹とブラック姉妹の類似を指摘している。

4 ローリングは様々なインタビューで、ヴォルデモートとヒットラーの、そして「死喰い人」とナチスの関連性を認めている。ウェブ・サイト『アクシオ・クォー

ト!』(*Accio Quote!*) (<http://www.accio-quote.org/articles/2000/fall00-bbc-newsround.html>)によると、2000年秋のイギリスのBBCテレビの番組『BBC ニュースラウンド』(*BBC Newsround*)のインタビューで、ローリングはヴォルデモートとヒットラーの類似を指摘している。さらに、2007年7月29日放送のアメリカのNBCテレビの番組『デートラインNBC』(*Dateline NBC*)のインタビュー「ハリー・ポッター——最終章」(“Harry Potter: The final chapter”)や、2007年10月の19日にニューヨークのカーネギーホールで開催された「オープン・ブック・ツアー」(Open Book Tour)でのインタビューで、「死喰い人」とナチスの類似を認めている。

なお、現在『デートラインNBC』のインタビューのスキリプトはNBCのホームページ (<http://www.nbcnews.com/id/20001720/>)などで読むことができ、またカーネギーホールでのインタビューのスキリプトはウェブ・サイト『漏れ鍋』(*The Leaky Cauldron*) (<http://www.the-leaky-cauldron.org/2007/10/20/j-k-rowling-at-carnegie-hall-reveals-dumbledore-is-gay-neville-marries-hannah-abbott-and-scores-more>)で読むことができる。

また、かつてローリングは、自身のオフィシャル・サイトの初心者向けの「Q&A (FAQ)」のコーナー (http://www.jkrowling.com/textonly/en/faq_view.cfm?id=58)でも「死喰い人」とナチスの類似を指摘していた。現在このコーナーは閉じられているが、そのときの質問と回答はウェブ・サイト『ハリー・ポッター用語集』(*The Harry Potter Lexicon*)の「血統」(“Blood Status”)の頁 (<http://www.hp-lexicon.org/wizworld/blood-status-names.html>)などで読むことができる。

ただし、厳密には、ヴォルデモートよりもゲラート・グリンデルヴァルド (Gellert Grindelwald)の方がヒットラーに近いとも考えられる。

5 国家統計局 (Office for National Statistics) が2005年10月に発行したガーデナーとコノリー (David Gardener and Helen Connolly) の記事「誰が『他の』民族集団なのか?」(“Who are the ‘Other’ ethnic groups?”)の「表 1.1」(5)参照。この記事 (other_ethnicgroup_tcm77-169085.pdf) は国家統計局のホームページで閲覧することができる。

6 2007年12月30日放送のイギリスのITV1テレビの番組『人生のある一年』(*A Year in the Life*)より。現在このテレビ番組のビデオはウェブ・サイト『ユーチューブ』(*You Tube*)などで見ることができる。また、そのときローリングが描いたハリーの子どもたちの世代の家系図は様々なウェブ・サイトで確認できる。

7 ただし、ディーンの肌の色が明らかになっているのはアメリカ版の『賢者の石』(*Harry Potter and the Sorcerer's Stone*)においてのみである (“‘Thomas, Dean,’ a Black boy even taller than Ron, joined Harry at the Gryffindor table.” 122)。イギリス版にはディーンに関するこの一文そのものが存在しない。また、リーについても、その髪形がドレッド・ヘアとなっている (“A boy with dreadlocks” 『賢者の石』105、“a tall boy with dreadlocks” 『不死鳥の騎士団』204) という理由からカリブ系あるいはアフリカ系と考えられているに過ぎない。さらにブレーズ・ザビニも、第一巻『賢者の石』の第七章の「組み分け帽」(the Sorting Hat)の場面(134)で初めて登場し

ているのに、アンジェリーナ同様、第六巻の『謎のプリンス』(171)に入るまで彼がカリブ系あるいはアフリカ系の男性であることは明らかにされなかった。

こうしたローリングの態度を好ましく思わない研究者も多く、研究者の中にはローリングの人種の描き方に偏りがあると考える者も存在する。例えばオストリー (Elaine Ostry) や、ヘイルマンと دونالدソン (Elizabeth E. Heilman and Trevor Donaldson) などは、いずれもその研究論文において、ローリングのアンジェリーナの人種描写について、「後で取って付けたようだ」(“perhaps this addition is an afterthought meant to emphasize Rowling’s increasing attention to racial issues” (Ostry 94); “This late detail reads as a diversity afterthought.” (Heilman and Donaldson 150)) と手厳しい。

8 ホグワーツ魔法学校の寮が四つに分かれた経緯にスリザリン寮の選民思想を読み取ることができる。特に『不死鳥の騎士団』第十一章の「組み分け帽」の歌(227-230)がそれを明らかにしているので、ここに引用しておく。

Said Slytherin, “We’ll teach just those
Whose ancestry is purest.”
Said Ravenclaw, “We’ll teach those whose
Intelligence is surest.”
Said Gryffindor, “We’ll teach all those
With brave deeds to their name,”
Said Hufflepuff, “I’ll teach the lot,
And treat them just the same.” (228)

For instance, Slytherin
Took only pure-blood wizards
Of great cunning, just like him,
And only those of sharpest mind
Were taught by Ravenclaw
While the bravest and the boldest
Went to daring Gryffindor.
Good Hufflepuff, she took the rest,
And taught them all she knew . . . (228)

9 「野蛮人」(“savage”)という表現が最初に登場するのは、第一巻『賢者の石』の第五章でドラコがハグリッドのことを描写する場面(89)である。

10 「ウォンバット試験」の中級の問題6「巨人についての次の文章のうち正しいのはどれか」に対する最後の選択肢eは「多くの巨人は食人種である」であった。現在この「ウォンバット試験」の中級問題はウェブ・サイト『ハリー・ポッター用語集』の「ウォンバット試験中級」(“W.O.M.B.A.T. Test—Grade 2”)の頁 (<http://>

www.hp-lexicon.org/wizworld/wombat/wombat2comments.html) で見るることができる。

11 ハグリッドにも存在する人間中心主義は、ダンブルドアに頼まれ、占星術の教師を引き受けたケンタウルのフィレンツェ (Firenze) と、彼の仲間のケンタウスの仲裁を買って出た際、思わずケンタウスのことを「ロバ」(“mules”『不死鳥の騎士団』769, 770) と罵ってしまうところにも垣間見られる。ハーマイオニでさえ、人間中心主義の非難を免れない。アンブリッジを懲らしめるためにケンタウルスを利用しようとし、ケンタウルスを激怒させてしまう(『不死鳥の騎士団』830-832)。ケンタウルのマゴリアン (Magorian) が言い放つセリフ、「我々のやり方はお前たちのやり方とは違うし、我々の法もお前たちのものとは違うのだ」(『不死鳥の騎士団』768) が、こうした人間による人間中心主義を厳しく批判している。

12 まず年号については、『死の秘宝』の353頁と『吟遊詩人ビードルの物語』(*The Tales of Beedle the Bard*)の14頁では1689年となっているが、『クイディッチ今昔』(*Quidditch through the Ages*)の36頁では1692年となっている。『幻の動物とその生息地』(*Fantastic Beasts and Where to Find Them*)では、魔法生物をマグルから隠すための国際会議(The International Confederation of Wizards)が1692年に開催された(xxvi)ということなので、『クイディッチ今昔』にはこちらの年号が記されたのではないか。また、名称については、『死の秘宝』(353)では“the International Statute of Secrecy”となっているが、『クイディッチ今昔』(36)と『吟遊詩人ビードルの物語』(13-14)では“the International Statute of Wizarding Secrecy”となっている。

13 随所に登場する、固くて歯が折れそうなロック・ケーキ以外にも、例えば、『賢者の石』(250)ではオコジョのサンドイッチが登場し、ハリーたちを驚かせ、『炎のゴブレット』(291)ではビーフ・キャセロール(蒸し焼き鍋)の中に牛の踵が入っていて、ハリーたちの食欲を失わせる。事実、シリーズ内で食べ物と種の間には相関関係が存在しているようで、劣っているものとして扱われている種は、あまり火の通っていない食事を好んでいる。例えば、ゴブリンは生肉を好み(『死の秘宝』562)、人狼のフェンリール・グレイバック (Fenrir Greyback) に噛み付かれたビル・ウィーズリー (Bill Weasley) も血のしたたるようなレアのステーキを好むようになっている(『死の秘宝』562)。

引用文献

- Albano, Teresa. “A summer of reading, struggle and Harry.” *People’s Weekly World* 20 July 2007. *People’s World*. Web. 14 Jan. 2013.
- Anatol, Giselle Liza. “The Replication of Victorian Racial Ideology in *Harry Potter*.” *Reading Harry Potter Again: New Critical Essays*. Ed. Giselle Liza Anatol. Santa Barbara: Praeger, 2009. 109-126.
- Barratt, Bethany. *The Politics of Harry Potter*. New York: Palgrave Macmillan, 2012.
- “Blood Status.” *The Harry Potter Lexicon*. 27 July 2007. Web. 14 Jan. 2013.
- Carey, Brycchan. “Hermione and the House-Elves: The Literary and Historical Con-

- texts of J. K. Rowling's Antislavery Campaign." *Reading Harry Potter: Critical Essays*. Ed. Giselle Liza Anatol. Westport: Praeger, 2003. 103–115.
- Dendle, Peter. "Monsters, Creatures, and Pets at Hogwarts: Animal Stewardship in the World of *Harry Potter*." *Critical Perspectives on Harry Potter*. 2nd edition. Ed. Elizabeth E. Heilman. New York: Routledge, 2009. 163–176.
- Eccleshare, Julia. *A Guide to the Harry Potter Novels*. London: Continuum, 2002.
- Gardener, David, and Helen Connolly. "Article: Who are the 'Other' ethnic groups?" October 2005. Office for National Statistics. Web. 22 Feb. 2012.
- "Harry Potter: The final chapter." Interview by Meredith Vieira. *Dateline NBC* 30 July 2007. NBC News. Web. 22 Aug. 2013.
- Heilman, Elizabeth E, and Trevor Donaldson. "From Sexist to (sort-of) Feminist: Representations of Gender in the Harry Potter Series." *Critical Perspectives on Harry Potter*. 2nd edition. Ed. Elizabeth E. Heilman. New York: Routledge, 2009. 139–161.
- "J. K. Rowling at Carnegie Hall Reveals Dumbledore is Gay; Neville Marries Hannah Abbott, and Much More." *The Leaky Cauldron*. 20 Oct. 2007. Web. 10 Jan. 2012.
- Ostry, Elaine. "Accepting Mudbloods: The Ambivalent Social Vision of J. K. Rowling's Fairy Tales." *Reading Harry Potter: Critical Essays*. Ed. Giselle Liza Anatol. Westport: Praeger, 2003. 89–101.
- Rowling, J. K. *The Casual Vacancy*. London: Little, Brown, 2012.
- . *Fantastic Beasts and Where to Find Them*. 2001. London: Bloomsbury, 2009.
- . "The first It Girl." *The Telegraph* 26 Nov. 2006. Telegraph Media Group. Web. 14 Jan. 2013.
- . *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. 1998. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Deathly Hallows*. 2007. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Goblet of Fire*. 2000. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Half-Blood Prince*. 2005. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. 2003. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. 1997. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. 1999. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Sorcerer's Stone*. 1997. New York: Scholastic, 1999.
- . *Quidditch through the Ages*. 2001. London: Bloomsbury, 2009.
- . *The Tales of Beedle the Bard*. London: Bloomsbury, 2008.
- "Transcript of Interview with J. K. Rowling." Interview by Lizo Mzimba. *BBC News-round* Fall 2000. *Accio Quote!* Web. 28 Feb. 2012.
- "W.O.M.B.A.T. Test — Grade 2." *The Harry Potter Lexicon*. 9 July 2010. Web. 14 Jan. 2013.